余象斗の華光大帝描写をめぐって

――『三教源流搜神大全』の「霊官馬元帥」と『南遊記』との比較を中心として――

林　桂如

はじめに

華光大帝とは、元から明にかけて中国の南方で流行していた、道教と仏教の影響のもとに誕生した神である。華光が、『道法会元』など道教経典のほか、『西遊記雑劇』などの戯曲や、『水滸伝』『警世通言』などの通俗小説にも登場していることからも、元明両代における華光信仰の隆盛をうかがうことができる。なかでも余象斗の『南遊記』は華光を主人公とした小説であり、華光について最も詳しい記載の見える文献である。

華光に関する記載はさまざまな資料に散見し、地域や時期により発展形態の相違があるため、異なる記載も多い。本論では、地域も時期も一番近いと見られる『三教源流搜神大全』と余象斗の小説である『南遊記』の二つを選び、両者を比較した上で、余象斗の華光に関する描写をめぐる問題についての考察を試みたい。

一　『三教源流搜神大全』と『南遊記』について

明代においては、儒、仏、道の三教が庶民層への普及のために結びつきを強め、その結果、三教思想が形成された。

この三教思想の下に三教に関する書物が数多く刊行され、流通した。そのうちで、万暦期に刊行された『新刻出像増補搜神記』[1]と『三教源流搜神大全』は、儒、仏、道を含む通俗的な神仏の事典として最も流行したものである。前者は六巻で、巻首の羅懋登の引に、万暦二十一年（一五九三）金陵の富春堂でこの本を得たという記述があることから、それ以前の成立とわかる。[2]後者は七巻で、内閣文庫に蔵される早期の版と考えられるものと、[3]宮内庁書陵部に蔵される四知館の楊麗泉から刊行されたものの二種類の明刊本が知られるが、いずれも成立年代は未詳である。[4]酒井忠夫氏によると、「『三教源流搜神大全』は元版『搜神広記』に明代の説話、伝を付加したものであろう」という。[5]両者を比較すると、『新刻出像増補搜神記』にはなく、『三教源流搜神大全』で付加された諸神のひとつに「霊官馬元帥」がある。[6]書名の「三教源流」が万暦以降の流行語であったことを考えれば、[7]万暦期には「霊官馬元帥」という神が広く知られており、それが『三教源流搜神大全』に収められたのだと考えられる。

華光が登場する現存作品の中で、『三教源流搜神大全』と時期が最も近いと考えられるのが余象斗の『刻全像五顯霊官大帝華光天王伝』（以下『南遊記』と略称）である。[8]『南遊記』の現存する最も古いテキストは英国博物館に蔵されるものであり、上図下文形式で四巻からなる分則本である。版心の上方には『全像華光天王伝』とあり、巻一の巻頭には「三台館山人　仰止　余象斗　編」「書林昌遠堂　仕弘　李氏　梓」、巻四の巻末の蓮牌木記には「辛未歳孟冬月　書林昌遠堂梓」（辛未には、隆慶五年（一五七一）と崇禎四年（一六三一）の二つの説がある。後者の説では崇禎四年の重刻であり、原刻本ではないと考えられている。[9]）、最後の挿絵の中には小字で「劉次泉刻像」と記されている。巻一の巻頭にある「三台館山人　仰止　余象斗　編」という署名、及び余象斗の『東遊記』の巻首に付されている「八仙伝引」に「不肖わたくしめは自ら『華光』などの小説を刊行しました（不佞斗自刊華光等伝）」という記述があることから、たしかに余象斗自身が『南遊記』を編集し、出版したことが知られる。

では、『三教源流搜神大全』と『南遊記』との前後関係はどうなのだろうか。馬書田は『華夏諸神』（北京燕山出版社、

一九九〇年）において「明人余象斗根據三教搜神大全的内容，編了一部五顯靈官大帝華光天王伝，又名南遊記，此書收入四遊記中。余象斗把一篇五百来字的履歴表，演為一部四巻十八回，近五万字的小説……（明の余象斗は『三教搜神大全』により、『五顯靈官大帝華光天王伝』、別名『南遊記』を編集した。この本は四遊記に収められている。余象斗は五百字余りの履歴書を四巻十八回の五万字近い小説に敷衍した）」と指摘している（一四一頁）。しかし、二階堂善弘氏は「霊官馬元帥華光続考」（『論叢アジアの文化と思想』第五号、一九九六）において「『三教源流搜神大全』の馬元帥の項目は、おそらく『華光顯聖』劇の方の影響を受けているとしたい。そして『南遊記』もおそらく『華光顯聖』劇の影響を受けているものと推察される」（六頁）と述べている。二階堂氏の指摘によれば、『三教源流搜神大全』と『南遊記』の間には直接の影響関係があるのではなく、両者とも既に散逸した『華光顯聖』劇の影響により生まれたものだということになる。

現存する資料からは『南遊記』の底本が『三教源流搜神大全』であるか否かは確定できないが、馬書田氏の言うような直接的な関係があるのか、或いは二階堂説のような間接的な関係なのかはひとまず措くとして、少なくとも両者に共通して見られる要素が多いことは確かである。

『三教源流搜神大全』では華光が諸神の一つとして記されているにすぎないが、『南遊記』は華光を中心に構成されている。そのため、当然両者の華光の描写には異なる点がある。またさらに、余象斗は小説を編集する際に、何らかの底本に基づき、他の関連の資料を加えたり、自作の詩や評語を挿入したりすることがしばしばあって、それは余象斗の出版した書物の特徴とも言える。[10] つまり、仮に余象斗が『三教源流搜神大全』を底本として『南遊記』を作ったのだとしても、余象斗は底本をそのまま写したのではなく、必ずなんらかの調整をし、自作の要素を挿入したと考えられる。

『三教源流搜神大全』と『南遊記』を比較すると、『三教源流搜神大全』にある内容は、『南遊記』にほぼすべて見ることができる。特に、華光の出身、三回の投胎に対する描写、玉帝の太子の傲慢な態度を怒って太子を打とうとするこ

と、母を地獄から救出することなどの重要な場面においては、大筋が同じであるばかりでなく、話の順序も同じである。前述した余象斗の編集姿勢を考えると、『南遊記』の、『三教源流搜神大全』と順序や内容が異なる箇所は、余象斗の手による改編の結果と考えられる。以下、両書の相違点についての検討を試みたい。ただし、『南遊記』にあって『三教源流搜神大全』には見えない内容については、別の機会に改めて論ずることにしたい。

二　『三教源流搜神大全』と『南遊記』の比較

二―一　記載の順序の相違

『三教源流搜神大全』「霊官馬元帥」と『南遊記』の相違点について、まずは記載の順序から検討したい。両者を比較すると、相違点が最も多いのは華光と諸鬼神との戦いの部分であり、ここでは、両書の記載の順序も異なっている。例えば烏龍大王を降参させる場面は、『三教源流搜神大全』では華光が二回目の投胎の後に起こした戦いの中に置かれるが、『南遊記』では華光の三回目の投胎の後のことになっている。烏龍大王がいつ降参させられるかは全体の構造には影響しないため、余象斗が編集の都合から調整した可能性が高い。

二―二　内容の相違

次に内容の相違について検討したい。『三教源流搜神大全』に見える内容のみを『南遊記』と比較するならば、両者には、大きく分けて「冒頭部分」、「華光兄弟」、「華光の母」及び「玄帝との関係」の四つの相違点がある。

二―二―一　冒頭部分

『三教源流搜神大全』「霊官馬元帥」の冒頭部分は「妙吉祥が焦火鬼を焼き殺したため、下界に降された」という話であるが、『南遊記』では「玉帝起闘宝通明会」（玉帝が闘宝通明会を開いた）としている。後者の大要は以下の通りであ

る。

玉皇上帝は三界の神祇及び西方諸仏を招き、闘宝会を開いた。三月三日になると天門を開け、上帝は上座に座り、諸神は順番に立っていた。上帝は諸神に各自の宝物を取り出させ、武芸を披露させようとした。まず登場したのは八洞神仙（漢鍾離、張果老、曹国舅、呂洞賓、藍采和、李鉄拐、何仙姑及び韓相子）であり、その次は観世音、普庵祖師、三元三品三官大帝、北方玄天大帝、目連尊者、孫行者であった。試合の結果、孫行者が勝ったため、上帝から賞品を得た。その後鳳凰山聖母、閻王太子が登場し、宝物を取り出して披露した。最後に東海鉄跡龍王が明珠一個を取り出して、上帝の前で披露すると、馬耳山大王も聚宝珠を出し、東海鉄跡龍王の明珠と優劣を争った。結局、上帝は馬耳山大王の聚宝珠のほうの勝ちと判定した。東海鉄跡龍王は恥ずかしさのあまり怒り出し、馬耳山大王を殺した。その直後華光は焦火鬼を焼き殺したため下界に降され、馬耳山大王の妻である馬耳山娘娘の母胎に入って生まれた。これ以降華光が投胎の際の父である馬耳山大王の仇を討つ物語が展開されていく。

「玉帝起闘宝通明会」と同じ内容の話柄は、『南遊記』以前、或いは同じ時期の華光に関連する他の記事には見つからない。しかし、『南遊記』以降に現れた資料には見ることができる。例えば閩東の寿寧で上演された『華光伝』傀儡戯がある。[11]『華光伝』傀儡戯（成立年代不詳）は『三教源流搜神大全』と同じく、「妙吉祥が独火鬼を焼き殺したため、下界に降された」（「煉燈花妙吉祥出世」）という描写に始まるが、「報父仇砍首鉄跡龍」という劇目では、鉄跡龍が馬耳大王にこう言っている。

一度目は、天界の闘宝会で、俺の龍珠は貴様の明珠に負けた。二度目は、貴様は息子が生まれた後、汚い水を東側の海に撒いたため、俺は頭が痛く目がくらんで、落ち着いていられなかった。三度目は、貴様は梳妝楼を建てようとしたが、他の場所を選ばずに、東側の岬に建て、また二番目の息子の浴水を梳妝楼の下にある海面に撒いた。再び俺は頭が痛くて目がくらみ、汚い水が竜宮に押し寄せてきた。（第一次，天曹斗宝会，我龍珠不如你明珠；第二

次，你生狗子，穢水潑落東海角，弄得俺頭痛眼花不安寧；第三次，你建梳妝楼，別地不建，建東辺海角，你二狗兒又將浴水潑落梳妝楼下海面，又弄得孤家頭痛眼花，穢水沖龍宮。）

『華光伝』傀儡戯に見える「第一次，天曹斗宝会，我龍珠不如你明珠」という鉄跡龍の話から、この劇の成立した当時、「天曹斗宝会」という話柄がすでに華光説話に加えられていたことがわかる。しかし、『華光伝』傀儡戯は、『南遊記』のように闘宝会に始まるのではなく、『三教源流搜神大全』と同じく妙吉祥の出世を始まりとしている。つまり、『南遊記』の「玉帝起闘宝通明会」は華光説話の一部として知られはしても、それに始まる構成はもとの華光物語のものでなかった可能性、つまり余象斗がそのように書き直した可能性もあるのではなかろうか。

そこで、『南遊記』の「玉帝起闘宝通明会」が、余象斗が先行する資料をそのまま写したものなのか、それとも自身が創作して書き加えたものなのかという問題について、「玉帝起闘宝通明会」の内容自体から考察してみたい。

玉皇上帝の闘宝会に参加した諸神の中で注意すべきは、最初に登場した八洞神仙と、後に現れた玄天上帝と孫行者である。彼らはそれぞれ『東遊記』（『八仙出處東遊記』の略称）、『北遊記』（『北方真武祖師玄天上帝出身志伝』の略称）と『西遊記』の主人公である。つまり、「四遊記」の主人公たちが『南遊記』に集まったということになる。もちろん、ただ単に「四遊記」の主人公たちが当時有名な神であったために取り入れられただけという可能性もあるが、この部分の上部にある「玉皇升殿衆神朝見」、「通明会漢鍾離顕宝」、「李鉄拐闘宝献葫蘆」、「観音闘宝献蓮花座」、「玄天上帝献旗闘宝」及び「孫行者殿内顕神通」という六枚の挿絵のうち、「四遊記」の主人公に関する挿絵が四枚あることから、「玉帝起闘宝通明会」という則は、編集者の余象斗にとってそれなりに重要な意味があったと考えられる。(12)

現存する資料の範囲では、余象斗が『西遊記』を刊行したかどうかはわからない。『東遊記』については、封面に「書林余文台梓」とあることと、巻首に付されている余象斗の「八仙伝引」により、余象斗が刊行したことがわかる。『北遊記』は、巻一の巻頭にある「三台山人仰止余象斗編」「建邑書林余氏双峰堂梓」という署名と、巻末の「壬寅歳季春

日書林熊仰台梓」の木記から、余象斗の本を万暦三十年（一六〇二）に重刻したものであることがわかる。[13] つまり、「四遊記」のうち、『西遊記』以外の『東遊記』、『北遊記』と『南遊記』は余象斗自身の手で出版されたものなのである。余象斗には自らの出版物を通して自らの他の出版物を売りさばこうとする習癖があったようで、例えば『列国前編十二朝』正文の末尾に「武王の紂征伐から天下掌握までについては『列国伝』に明々白々たる記載がございます、皆様におかれましては『列国伝』をお買い求めいただけますれば、一読にして一切をご了解されることと存じます。（至武王伐紂而有天下，『列国伝』上載得明白可観，四方君子買『列国』一覧尽識）」という、やはり自身が刊行した『列国志伝評林』に対する宣伝文句を書き加えている。[14]『南遊記』では華光の出現は諸神の闘宝会が終わった後のことである。つまり、闘宝会は華光の一回目の投胎の際の父の死因を述べるためだけに書かれたものであることがわかる。しかし、この部分について、『三教源流搜神大全』では、「東海龍王と戦って殺し、水の化物を除いた（能戦斬東海龍王，以除水孽）」という記述があるのみで、華光が東海龍王を殺した理由は必ずしも父の仇を討つためといっているわけではない。このように、当時華光が東海龍王を殺した原因が定まっていなかったことと、またさらに前述した『華光伝』傀儡戯では「第一次，天曹斗宝會，我龍珠不如你明珠」と見えながらも華光の前身である妙吉祥の物語を始まりとしていたことを合わせて考えれば、『南遊記』の冒頭に置かれる「闘宝会」は、『北遊記』などの宣伝を意図した余象斗によって編集された可能性が高いのではなかろうか。

二―二―二　華光の母と兄弟

『三教源流搜神大全』で華光が三回目に投胎した場面では、「また、ひとつの母胎に五人の男と二人の女がいた。ともに鬼子母の体から生まれた（又化為一包胎而五昆玉、二婉蘭，共産於鬼子母之遺体）」という記述がある。『南遊記』の「華光在蕭家庄投胎」では、吉芝陀は蕭長者の妻である范氏を食べてしまった後、范氏そっくりに姿を変えて、華光兄

弟五人を生んだということになっている。ここでは華光の母は吉芝陀というが、「華光三下豊都」則に二人の元帥が豊都王に言った「這人母是鬼祖母」という言葉から、吉芝陀とは鬼祖母（鬼子母）であることがわかる。鬼子母とは、もともと他人の子をつかまえて食う悪女鬼の訶利帝であったが、釈迦の教化で改心して善神となったのである。[15]『南遊記』の鬼祖母は吉芝陀と名を変え、幼児のみを食う鬼ではなく、広く人を食う鬼になったが、吉芝陀の原型が幼児を食う鬼子母であった痕跡はまだ『南遊記』にも残っている。『南遊記』の「華光三下豊都」で華光が吉芝陀を地獄から救出した後に、「吉芝陀の人を食う病気を治すには、王母娘娘の仙桃を食べるしかない」と魔軍が華光に言い、華光が斉天大聖を装って仙桃を盗みに行ったという点は注目に値する。南宋期の西遊記物語を伝える『大唐三蔵取経詩話』の「入王母池之処第十一」に、唐三蔵が仙桃を食べようとすると、池に落ちた仙桃が子供の形となって現れ、猴行者が子供を取って「和尚、你喫否」とたずねたのに驚いたという場面がある。しかし、万暦期の『西遊記』小説では、王母の仙桃は見た目は普通の桃で、子供の形で現れるのは五庄観の人参果に変わっており、『西遊記』第二十四回「万寿山大仙留故友　五庄観行者竊人参」で人参果は「三千年を経て花が咲き、三千年を経て実を結び、再び三千年を経てようやく成熟する（三千年一開花、三千年一結果、再三千年纔得成熟）」と紹介されている。一方、『南遊記』では、華光が盗んだのは王母の仙桃であるが、魔軍の話を聞いて斉天大聖を装って仙桃を盗みに行ったことと、玉帝が本物の斉天大聖に「仙桃は三千年を経て花が咲き、三千年を経て実を結び、三千年を経て成熟し、ようやくこの桃になった（仙桃乃三千年開花、三千年結子、三千年成熟、纔得此桃）」と言った話から、『南遊記』のこの部分が『西遊記』の「五庄観行者竊人参」に基づき創作されたことは明らかであろう。つまり、ここでは盗まれたのは仙桃であるが、余象斗は子供の形をした人参果を念頭に仙桃の描写をしており、鬼子母であった吉芝陀の人を食う病気を治す方法として利用したのではなかろうか。『南遊記』のこの部分は西遊記物語の影響をうけたこともうかがえる。

謝肇淛（一五六七―一六二四）の『五雑俎』巻十五に、「小説に載っている華光天王の母は、人を食べることを好ん

だために、餓鬼獄に入られた。数百年を経て、その子は修行を終えて、母を救出したが、母は地獄から出てきたばかりで、人肉を求めた。その子は泣きながら諫めたが、母は怒って言った。「なんと親不孝な！人肉を食べられなければ、私を救出したところでなんになるというのか。」世の中において、悪事をなす者とはそういうものだ（小説載華光天王之母，以喜食人入餓鬼獄，経数百年，其子得道，乃拔而出之，甫出獄門，即求人肉，其子泣諫，母怒曰：『不孝之子如此，若無人食，何用救吾出來。』世之為悪者，往往如此矣）」という記事がある。謝肇淛はこの記事が小説からのものであると明言している。この場面を『南遊記』の同じ場面と比べてみると、「以喜食人入餓鬼獄，経数百年，其子得道」という点が『南遊記』と相違している。『南遊記』では、吉芝陀は人を食べるところを龍瑞王に見られ、捕まえられて豊都に投げ込まれた。華光はこのことを知るや、吉芝陀を救出しようとして「鬧東岳廟」、「鬧陰司」、「焼東岳廟」、「三下豊都」などの騒ぎを起こした。謝肇淛の言う「餓鬼獄」は『南遊記』には見えず、救出行動が成功したのも「経数百年，其子得道」ということによるのではなく、華光が天尊を装い、地獄の諸神を騙したことによるのである。「入餓鬼獄」ということでよく知られる女性は目連の母であり、「経数百年，其子得道」の子は目連のことである。万暦期に目連戯は既に流行していた。特に福建は目連戯の発展において重要な地区の一つと見られる。[16] 華光が地獄から母を救出する部分は目連の物語から来たものと考えられ、福建の出身である謝肇淛が見た小説の「入餓鬼獄」と「経数百年，其子得道」は、目連物語の「地獄救母」から華光物語の「地獄救母」へ発展していく過程の痕跡と言えよう。そして、後に『南遊記』の階段で目連色の濃すぎる部分が消され、華光らしい「地獄救母」が完成したと考えられる。

次に華光の兄弟について検討したい。『三教源流搜神大全』は、鬼子母というひとつの母胎に五人の男と二人の女がいた（「又化為一包胎，而五昆玉二婉蘭共産於鬼子母之遺体」）としているが、『南遊記』の「華光在蕭家荘投胎」では、ひとつの母胎に五人の男のみがいることになっている（吉芝陀は五人の兄弟に「你五兄弟作包胎，我又生一個女児」と言う）。その部分の上に「長老剖開肉毬」という題の挿絵がある。即ち、『南遊記』では、二人の姉妹を一人の娘とし、

その娘も五人の兄弟と同じ肉毬から生れたのではないこととした。大勢の兄弟が一つの毬から生れたという表現は『南遊記』だけではなく、余象斗の『列国前編十二朝』にも見える。『列国前編十二朝』の「天皇降世定干支甲子」という則に天皇兄弟十三人が石毬から生れたという記述があり、その上にも「天皇成大石毬降生」と題する挿絵がある。両者を並べると表現方法の類似が目を引く。『南遊記』では華光兄弟は五人が肉毬から生れ、『列国前編十二朝』では天皇兄弟は十三人が石毬から生れた。『列国前編十二朝』において、史実として存在しない天皇兄弟の出生を編集する際に、余象斗が、天皇兄弟と同じ神という身分を持ち、兄弟が多くいる華光の出生から着想を得た可能性がある。しかし、それは余象斗自身が既に刊行していた『南遊記』からの着想だったのか、それともその時点でまだ『南遊記』は未刊で、単に当時流行していた華光物語からの着想だったのかについては、現時点でははっきりしない。

二―二―三　玄帝との関係

『三教源流搜神大全』における華光と玄帝の関係は、華光が母を救出し、仙桃を盗み、斉天大聖と戦い、菩薩座左になった後、玉帝が華光の功労を表彰するために玄帝の部下に封じた、というものである。[17] 一方、『南遊記』では、華光が「大鬧天宮」し、太子を攻撃しようとして天兵に追いかけられ、北方に逃げるときに玄帝に制圧されたということになっている。つまり、『三教源流搜神大全』では華光は多くの功労により玄帝の部下に封じられたのに対し、『南遊記』では華光は玄帝に制圧されたためにやむをえず玄帝の部下になったというちがいである。

華光と玄帝とを関係づけた経緯は、また『北遊記』の「祖師入天宮救華光」の一則にも見える。その部分の大要は以下のようである。西方太白金星が玉旨を玄帝に読み上げた。玉旨は「華光が悪い性根を直さずに、太子を攻撃しようとし、今また南天宝徳関を焼き捨て、天宮を混乱させた。北方壬癸の水である玄帝が南方丙丁の火である華光を征服することができるため、華光を征服しにゆくように命ずる」といったものである。華光が天宮を混乱させ、太子を攻撃しよ

うとしたという筋は『南遊記』と類似している。特にその後の玄帝と華光との戦いの描写は、『南遊記』とほぼ等しい。『北遊記』と『南遊記』とで異なる点は次の二つのみである。

一つは南天関を焼くことの扱いである。『北遊記』ではこれは華光が玄帝に征討される理由となった罪のひとつであるが、[18]『南遊記』では玄帝が華光を征服した際、みずから南天宝徳関を焼けば逃げられると教え、華光はそれに従ってはじめて関を焼く。[19]『三教源流搜神大全』では、『北遊記』と同じく、太子の傲慢に怒ったために華光が南天関を焼いて天宮を混乱させた（「殊憶太子傲侮怒帥，火焼南天関，遍敗天将……」）という記述がある。『三教源流搜神大全』と『北遊記』との関係については、二階堂善弘氏が『道教・民間信仰における元帥神の変容』（『関西大学東西学術研究所研究叢刊』二七。関西大学出版部、二〇〇六年）において「『三教搜神大全』と『北遊記』では、人員及び名称の一致する率がかなり高い。これは恐らく、余象斗の基づいた資料の中に『三教搜神大全』があったためであると推察される。むろん、神の名や説話の不一致など、それだけでは片付けられない問題も多いが、少なくとも『三教搜神大全』に類した書を見ていたことは間違いないと思われる」（三十二頁）と述べている。この二階堂氏の指摘に基づきながら、以下のような推測を試みたい。『三教源流搜神大全』では華光が功労により玄帝の部下に封じられることになっていた話を、『北遊記』では華光が玄帝に制圧されたためにやむをえず玄帝の部下になったことにした余象斗の改編は、『北遊記』の主人公である玄帝の勇ましさを顕彰するためであったと思われる。それに対して『南遊記』の主人公は華光であるから、本来華光にとって不利ともいえる描写になっているのもおかしいのではあるが、余象斗自身による『北遊記』が既に出版されていたために、華光が功労によって玄帝の部下に封じられた話に戻すわけにいかなかったという次第なのではないか。そこで余象斗は、『南遊記』の華光と玄帝が関わりを持つ部分において、『北遊記』をそのまま写した上で、なおかつ後の話を続けていくために、『北遊記』と同じように華光が捕まってしまっては困るので、玄帝が華光に逃げさせるために「火焼南天宝徳関」の計略を教えたことにしたのではなかろうか。

『北遊記』と『南遊記』の相違点の二つ目は、『南遊記』では「今私の部下は大将三十五人であるが、お前が私に服従して三十六人目になるならば、私はお前を助けよう（我部下前有三十五員大将，你若帰順我，湊成三十六員，我即救汝）」という玄帝の台詞が増えている点である。なぜ玄帝は「三十六員大将」を集めなければならなかったのか。その理由は『北遊記』に見えている。『北遊記』巻二の「祖師得道見帝」に、玉帝は祖師（玄帝）に「三十六員天将」を管理させていたが、彼らの知らないうちに「三十六員天将」は全部下界に下りてしまったので、玉帝が祖師に「三十六員天将」を連れ戻すよう命じるという話が見られる。その後、『北遊記』は玄帝と諸鬼神との戦いを描くようになる。つまり、『北遊記』では「三十六員天将」を連れ戻すのが玄帝の重要な任務であり、『北遊記』の約半分は玄帝が「三十六員天将」を征服する過程を描写したものである。『北遊記』の最後には、「三十六員天将」の名前が全部きちんと書かれている。その中には「正一霊官馬元帥」がある。『南遊記』の方で、どこにも「三十六員天将」を集める由来を説明していないのは、『南遊記』を編集する際に、華光が「三十六員天将」の一員として玄帝に征服されたことがすでに広く知られていたからではないだろうか。

また、『北遊記』の「祖師入天宮救華光」では華光が玄帝に「某乃姓馬名勝」と言っているが、[20]「祖師河南収王悪」では「馬元帥乃是妙吉祥」という言葉が記述されている。馬勝、すなわち馬元帥の名は『道法会元』などの道典に見られ、道教の神の名であることがわかる。『三教源流搜神大全』や『南遊記』に現れる「馬元帥の前身が妙吉祥」という仏教と結びつく表現と、「馬元帥の名が馬勝」という道教神の様相との両者が、『北遊記』に共存していることから、『北遊記』は華光が純粋の道教神から仏教の色彩を帯びた神へと変化していく段階で編集されたことがわかる。その後、華光に関連するさまざまな記事を整理し、『南遊記』に見える独特な華光物語が誕生したと考えられる。

おわりに

余象斗の『東遊記』「八仙伝引」に「不肖わたくしめは自ら『華光』などの小説を刊行しました。それらは全部わたくしの頭を絞って編集したもので、苦労も多く、お金もかなりかかりました（不佞斗自刊華光等伝，皆出予心胸之編集，其労鞅掌矣，其費弘鉅矣）」という苦心を表白した言葉が見られる。余象斗が本当にそこまでの苦労をしたのかは置くとして、少なくともこの言葉から『南遊記』には余象斗が手を加えた部分があることが明らかに知られる。小論では『三教源流搜神大全』に見える内容のみを『南遊記』と比較した上で、両書の相違部分から、『南遊記』と『西遊記』、『北遊記』などの小説との関係を考察してきた。特に『北遊記』との関係について、『南遊記』の「玉帝起鬪宝通明会」の則に『北遊記』などを宣伝する要素が組み込まれているのではないかということ、『南遊記』の中に『北遊記』に基づいた描写が見られることなどから、『南遊記』は『北遊記』が出版された後に刊行されたものではないかということを述べた。今後さらに華光大帝ばかりではなく、『南遊記』、『北遊記』および『東遊記』に共通して見える他の人物についての描写を通し、三者の成立過程における関係を考察してみたいと考えている。

注

（1）酒井忠夫『中国善書の研究』（弘文堂、一九六〇年）「第三章　明代における三教合一思想と善書」を参照。

（2）現存するテキストは二つある。一つは国立公文書館内閣文庫に蔵され、富春堂の原刻本と考えられる。また一つは万暦三十五年（一六〇七）の重刻本であり、『続道蔵』に収められている。

（3）李豊楙『中国民間信仰資料彙編』第一輯「提要与総目」（台湾学生書局、一九八九年）三頁を参照。

（4）『新刻出像増補搜神記』と『三教源流搜神大全』のテキストについての詳細は、二階堂善弘『道教・民間信仰における元帥神の変容』（『関西大学東西学術研究所研究叢刊』二七。関西大学出版部、二〇〇六年）「第二章　『三教搜神大全』の構成」を参

照。

(5) 酒井氏前掲書三〇〇頁を参照。

(6) 『新刻出像増補搜神記』と『三教源流搜神大全』の各項目についての比較は、前掲二階堂氏『道教・民間信仰における元帥神の変容』五三～五九頁を参照。

(7) 酒井忠夫氏は前掲書三〇〇頁において「ただ「三教源流」の文字が用いられるのは万暦時代に至ってからのようで、それは憨山徳清（一五四六―一六二三）に始まったという説がある。とにかく「三教源流」は万暦以後の流行語であった」と述べている。憨山徳清は万暦十八年（一五九〇）に『観老荘影響論』、別名『三教源流異同論』を書いた。

(8) 『南遊記』のテキストについての詳細は、大塚秀高『増補中国通俗小説書目』（汲古書院、一九八七年）を参照。本論では上海古籍出版社『古本小説集成』所収の英国博物館蔵本の影印本を使用した。

(9) 辛未に二つの説があるということについては、上海古籍出版社『古本小説集成』所収の「華光天王伝」の「前言」（孫遜著）を参照。崇禎四年の説については、磯部彰の『西遊記受容史の研究』（多賀出版、一九九五）「第Ⅳ部　『西遊記』受容をめぐる諸問題」五三九頁と、周曉薇の『四遊記叢考』（中国社会科学出版社、二〇〇五年）「第二章　現存『四遊記』的主要版本及内容提要」二二頁を参照。

(10) 例えば、『水滸志伝評林』では文中にも評にも余象斗作の詩が見られる。『列国前編十二朝』では余象斗は底本としたと思われる『鼎鍥趙田了凡袁先生編纂古本歴史大方綱鑑補』（『袁氏綱鑑』と略称）に対して、戦争場面の描写、神話及び伝説、自作の詩を挿入し、さらに各則の正文の後に評語をつけている。拙稿「余象斗の『列国前編十二朝』について」（『日本中国学会報』第五十九集、二〇〇七年　掲載予定）を参照。

(11) 『華光伝』傀儡戯についての詳細は、葉明生『福建寿寧四平傀儡戯華光伝』（『民俗曲芸叢書』所収。施合鄭民俗文化基金会、二〇〇〇年）「前言」を参照。ここで使用するテキストは保安壇抄本『華光伝』である。

(12) また、ここでは余象斗が孫行者をたたえる詩を書いている。『南遊記』には余象斗自作の詩は二首しかない。そのうちの一首がここに置かれることからみれば、余象斗はこの部分を読者に注目させようとしたのだろう。

(13) 現存する万暦三〇年の『北遊記』のテキストは、原刻本ではないと考えられる。磯部氏前掲書五二～五三頁と、周曉薇前掲書二五頁を参照。

(14) 註10の拙稿を参照。
(15) 鬼子母については、中野美代子『中国の青い鳥　シノロジーの博物誌』(南想社、一九八五年)「Ⅱ　女人国」を参照。
(16) 目連戯曲についての詳細は、陳芳英『目連救母故事之演進及其有関文学之研究』(国立台湾大学文史叢刊、一九八三)を参照。
(17) 原文は「又以母故而入地獄，走海蔵，歩霊台，過豊都，入鬼洞，戦哪吒，竊偲桃，敵齊天大聖，釈仏為之解，至孝也。後復入于菩薩座左，至慧也。玉帝以其功徳齊天地而敕元帥于玄帝部下……」
(18) 原文は「朕不料華光不改原心，打朕太子，今又放火燒南天宝徳関，天宮大乱，衆臣挙卿乃北方壬癸之水，能除南方丙丁之火，可収華光。」
(19) 原文は「上帝曰：你乃火星，可向南方走，南方丙丁火，火助火，燒了南天宝徳関，方可走脱上界。」
(20) 華光が他の神と混同されたことについては、二階堂善弘氏が「華光と関帝」(『アジア文化の思想と儀礼：福井文雅博士古稀記念論集』(春秋社、二〇〇五年)に収められる)において「また華光は火神としても有名である。そのため、時に同じ火の神である火徳真君や、王霊官・炳霊公との混同がある。馬元帥としての華光であるが、馬元帥は『道法会元』などによれば、姓を馬、名を勝といい、火を司る神である」と述べている(四六六頁)。また、前掲同氏『道教・民間信仰における元帥神の変容』一八〇～一八九頁も参照されたい。